

鹿児島の昆虫③

キオビエダシヤク

昆虫担当 中峯浩司

キオビエダシヤクはシヤクガ科の一種で、幼虫がイヌマキの葉を食害することで知られています。南方系で、もともと県本土には生息していませんでした。しかし、1999年頃薩摩半島南部に侵入して分布を北に広げ、幼虫による食害のため大量のイヌマキが枯死しました。



成虫はモンシロチョウほどの大きさで、黒紫色に輝く体と羽に黄色の帯をもつ美しいガです。春と初夏、それに秋の年3回ほど発生します。また、昼間飛び回り花にも来るた

め、チョウとよく間違われます。実際、「めずらしいチョウを捕まえたが図鑑に載っていないので名前を知りたい。」という問い合わせの電話がよくあります。

現在、侵入初期に大きな被害が出た南薩方面では終息し、かわりに県中部から北部にかけて局所的に大発生が見られるようです。

実はこのガは、約50年前にも県本土で大発生し、大量のイヌマキが枯れたことが記録に残っています。ところが、いつの間にかいなくなってしまいました。

今回の発生がいつまで続くのか、どこまで分布を広げるのか、地球温暖化という前回の大発生時には無かった要因がどう影響するのか、興味は尽きません。

本種についての情報を集めています。特に県北部で見かけた時は、博物館に連絡いただければ幸いです。電話099-223-6050



鹿児島の動物②

ベッコウサンショウウオ

脊椎動物担当 中間 弘

自然だより第2号に引き続き、鹿児島県に棲息するサンショウウオ4種類の中から、今回はベッコウサンショウウオを紹介いたします。

九州のみに分布するサンショウウオで、阿蘇山から霧島・紫尾山にかけての、標高500～1500mの広葉樹林帯に棲息する典型的な山地溪流性サンショウウオです。日本産サンショウウオの中で最も美しいといわれ、全長13～19cmの成体には鮮やかな黄色の地色に紫褐色の斑紋が散らばり、ベッコウ模様となることからこの名があります。

日本産のサンショウウオの多くは標高の高い山地の溪流に産卵します。ベッコウサンショウウオもその1つで、幼生期には指先に爪があって、川底の石の隙間で川虫などを食べて成長します。成体になると沢近くの倒木の下などで生活するため、見つけるのはとても難しいです。

産卵は3月末～5月と推測されますが、調査の結果から幼生は翌年の秋に変態して上陸するらしく、沢では一年を通して幼生の姿を確認できます。幼生にとって安定した水量と水温があることは必須の要件ですが、こうした要件を満たす広葉樹林は伐採によってかなり少なくなってきており、ベッコウサンショウウオの生息環境がどんどん失われています。

ベッコウサンショウウオを守ることは、人にとっての豊かな水資源を守ることに繋がるのではないかと思います。

